

波乱の中国情勢

中嶋 嶺雄 対 関 憲三郎

(東京外国語大学助教授)

(読売新聞論説委員)

中嶋嶺雄 中国では、この十月の初めに非常に衝撃的な出来事が起こりまして、これまでいわば毛沢東側近としてのみならず、中国の政治体制の最も上層部にいた人たちが、一挙にして転落するという事件が起こったわけですが、考えてみますと、これは単に文化大革命とは何であったかという問題のみならず、やはり毛沢東政治に対する根本的な問い直しということも含んでいるような気が致します。

ます。

そこで、今日は今回の事態の一つの中心的な問題として、なぜこのような事態が起こり急激に、しかもこうもドラマチックに起こったのか、というようにところからはじめ、更にその後、こうしたいわゆる北京政変を代償にして党主席に就任した華国鋒を中心とする新しい中国の政治体制の性格なり、安定性というようなものを話し合ってみたいと思います。またそのことが、同時に国際社会の中にどういふ影響を与えるかということについても触れられたらと考えているのですが、関さん、新聞の現場にいらっしやって、このニュース第一報、どういふふうにお感じになったでしょうか。

関憲三郎 今年の一月に、前の周恩来総理が亡くなられて、一カ月ぐらいで政変が起きたわけですね。そのころから、どうも少しおかしいなということで、だいたい今度のような方向の、政変がまた毛沢東以後に起きるんじゃないかと、いう予測はあったわけですね。ただ、それがああいふ激的な形で非常に早くきたわけですが、そういう形としてはいろいろ考えられましたが、だいたいいわゆる上海グループというものが当然失脚していく運命にあるんじゃないかと思っていました。ただ、それが非常に劇的な形できたということは、ちょっと予想外だったですね。

中嶋 そうですね。考えてみますと、いま御指摘のように中国は周恩来総理の死後、いわゆる走資派批判が起こりましたし、そしてこの走資派批判が進む過程の中で、天安門事件が起こりました。天安門事件はある意味で周恩来総理を追慕するという民衆の気持の発露であったとともに、いわゆる「反文化大革命」と私は言ったんですが、いわば今回の四人組の人たち、特に江青、姚文元なんかに対する批判が前面に出ておりましたですね。そういう中国が非常に激動を続けている中で、華北大地震もありましたし朱徳総司令もその前に亡くなったわけでありまして、こういう事態のあとに毛沢東の死が訪れた。これはやはりある意味では中国にとって時期的にも非常に内部的に流動化している中で毛沢東が死んだということ、私はそういう意味では毛沢東の死そのものは解き放たれた死だというふう

に言ったのです。どうもこの毛沢東の死を待って、新しい政治の動きがすでに始まりつつあった。ある意味では、これは文化大革命の中でしばしば言われてきた中国の党内闘争、あるいは階級闘争は、食うか食われるかの闘争だということが言われたのですが、今回の事態を見ておきますと、結果的にはその四人組の人たちがクーデターを企てようとしたというのですが、果たしてその真相はどうなのか、まだその辺は定かでないような気がします。私など、むしろ一種の予防クーデターとい

ましようか、華国鋒を中心とするグループが、まさに食うか食われるかという状況の中で一挙に四人組を失墜させたのではないかと、いうふうに見るのですが……

それは、もう権力構造の中核においてこういういわば拮抗した状況があったような気がしません。ですから例えば外から見ていても、そのことは幾つか兆候があったような気がします。例えば『人民日報』は、九月の十六日から「毛沢東語録」と称して、「既定方針通りやれ」というのを毎日のように、連日出しているのです。これも、こういう語録が連日出るということ自体非常におかしかったし、それから服喪期間、喪ということなどは、十八日の毛沢東の葬儀があったあと、だんだん喪が明けてきて、『人民日報』などは二十二日から普通の紙面にもどって、喪ということを示す黒わくが取れている。北京などでも、半旗が掲げられたのが、また普通の国旗、五星紅旗にもどったとか、それから喪章を付けていた人たちが取り始めたとかいうこともいわれておりました。ところがそれが不統一でまた喪章を付け始めたとか、また喪の期間が延びたというんですね。これはやはり、喪というはある種の政治休戦であったわけで、その政治休戦を意味する喪の期間をめぐっても、内部で調整がつかなかったということを示しているような気がします。

そこで、『学習と批判』といういわゆる上海グループ、四人組の人たちが作っていたと思われる機関誌などは、考えてみますと、その第十号が繰り上げ発行されています。また『紅旗』第十号も繰り上げ発行されている。中国でこれらの機関誌が繰り上げ発行というのは非常に珍しいことで、こういう食うか食われるかという状況の中で、やはりすでに四人組の人たちは「既定方針」というスローガンを出し、そしてある種のプレス・キャンペーン、イデオロギー・キャンペーンをしようと考えていたと思うのですが、そこで十月一日の共同社説が出なかったということ、これは考えてみるとたいへん大きな意味があったと思います。そして、あとで分かるのですが、七日にああいう事件が起きて、十日に、これまたいへん異例なことですが、十日というのは双十節で、台湾の建国記念日であっても中国とは関係ない、それが中華人民共和国の建国記念日に社説が出なかったのが十日に出ている。こういう異例の状況が幾つか重なりましたので、やはり事態はかなり深刻であったと思うのですが……。

そこでこういういわば非常に切羽詰まった状況の中で一挙に事態を処断した華国鋒体制というものの形成過程がまた非常にドラマティックであるだけに、そしてこれまでと違って急激に華国鋒支持のキャンペーンが起っておりますし、この転換がもう少ししみに行われるとすれば、私の今まで考えたことからすれば、いわゆる文化大革命にはかなり無理があったし、上海グループ四人組はそういう意味で丹頂鶴といましようか、毛沢東あつてはじめてこの政治の上層部に存在してき得た人たちであつただけに、毛沢東亡きあと、打倒されるという運命は分かるんですが、しかしながらその後の転換がまた非常に急激でして、これはたいへんな中国の人たちにとって大きな価値の転換であるし、非常に大きな衝撃はすなわちですね。それがまた急激に華国鋒支持のなだれ現象が起つていくということですね。

閉 普通、党内が安定しますと、当然今度はまず党中央委員会総会を開いてそこで党主席、副主席、政治局のメンバーを選出していく手続が穏当だと思つてますが、それがああいう一種の政変の形を取つたということは、当然それだけの党内不統一の問題があつたわけですが、これはああいう非常に変則的な格好になりましたが、今度の四人組の追放は、一般大衆からも非常に歓迎されるようですね。表情が非常に明るいということと、もう痛快事であるというふうな……。これは分かるような気がしますね。それで、それによってむしろ華国鋒体制が、あの四人を一挙に果断に処置したことによって、かえって安定性を増すんじゃないかと。といいますのは、あの四人組に対する恨み、非常に恨まれてきたから、それが例えば鄧小平さんの、いわゆる右からの巻き返しというやつですね。あれもかなり江青グループに対する反感があつたと思つてですね。そういうものがあの果断な処置によって沈静化されていくと。そういうことで、まずそれが一つですね。

それから、基本的な問題は、じゃ今まで文化大革命を推進する先兵の役を果たしてきた人々を今度切つたが、それによつて文革路線を否定するのか、というふうな、そういう意見も出てくるわけです。わたしはそうじゃなくて、むしろあの四人を切るによつてはじめて文化大革命は完結すると、そういう意味を持つていてと思うんですね。だから、あれが毛沢東路線の継承である。

といいますのは、去年の一月に、十六年ぶりに全国人民代表大会を開きそこで林彪や孔子批判は継続するといひ、その一方で、十六年前の、この前の人民代表大会で提起された四つの近代化といひ……。それを改めて周恩来が提起したわけですね。そうしますと、あそこで一応、ここで文革はひとまず完成させて、その経験を踏まえた上で、継続革命の精神を忘れないようにして、これからまた近代化に取り組もうではないか、そういう線だったと思つてですね。

ところが、そこで一つだけまだ残つて問題がありましてね。これは江青グループの四人組の問題だと思つてですね。と

いいますのは、最初にあの文化大革命で紅衛兵運動の指導に当たつた文化革命小組それが極左、あるいはアナキストというふうなことで、どんどん失脚していくわけですが、最後に林彪事件で組長の陳伯達もやられた。ところが江青グループはいちばん林彪とも最初から密接な関係があつたわけで、それがなぜ不問に付されるのか。林彪との人間関係の釈明もない。それから紅衛兵運動の指導の誤りも自己批判してない。そういう一つの問題が何かうやむやに不問にされたまま、一応文革完結という格好を取つたわけですが、ところが今度はあの連中が、近代化を推進する場合、まだ実務経験が非常に不足していますから、だから近代化のスケールの大きいものというのは、自分たちの手に余るわけですね。そうしたら当然そこで、もつと謙虚に実務の学習をしなきゃならん。その新しく近代化が始まる中で、もつと指導力を養っていかなきゃならん。今度それをやらなくて、去年の一月の人民代表大会が終わつてから、また変ないわゆる継続革命的なものを始めたわけですね。

それは本當の継続革命じゃなくて、それを錦の御旗にして、実務派に食つてかかることです。そういうことで指導の誤りの自己批判もしなければ、学習もしようとしなくて、またその継続革命を錦の御旗にして、文化革命の次の段階に移つ

たはずなのに、またそういうのはね返りのな行為をやり出した。それが非常に孤立し、反感を招きそういう傾向を生んだわけですね。だから、華国鋒体制側が言うのは、毛沢東自身が連中のセクト主義を批判して彼らを切ろうとしていたと。それが毛沢東の最後の闘争ということになります、あれは恐らく真実だろうと思うんですよ。

中嶋 なるほどね。いま関さんがおっしゃったように、ちょうど文化大革命は六五年の秋から始まったことになりませんが、いわゆる大衆運動として、紅衛兵運動として出てきたのは、ちょうど今から十年前ですね。一九六六年の秋でした。

たまたま私も当時北京にいらした関さんと北京で紅衛兵運動の激しいときにお会いした記憶があるのですが、この十年を振り返ってみると、本当にそういう意味では中国は単に政治的に揺れ動いただけではなくて、多くの人たちが失墜していた。どうも私はこの政治的な失脚者というものが、結局この四人組が次々にレッテルを貼って、階級闘争の名の下において、いわば幻の階級なり、敵をつくっていった結果じゃないかというふうに考えるわけですね。そうしますと、どうもいまの関さんの御説明もそれで一つの論理的な整合性を得るんですが、どうも事態はそれだけで収まるかどうか。つまり怨念ということからいえば、この四人組なり、文革推進派に対する怨念は、少な

くともこの十年間というものにまでさかのぼるんじゃないか。しかし中国人はカタをつけるという思想が歴史的、伝統的にやっぱりあるような気がするんですね。

そこで、私は恐らくその点で少し関さんと違ふとすれば、どうも現在の状況は、いわば脱文革、ないしは反文化大革命ではないかと思えます。とにかくその文化大革命の最も正統的な担い手であった人たちが、かつての陳伯達、林彪、そして今回の四人組という形で全部消えてしまった。こういう状況の中で果たして中国の人たちはなお文化大革命を獲得し得るのかどうかという問題がありますね。それで、やはり文化大革命そのものが無理ではなかったのかということ、これは私は天安門事件を見ますといわゆる反革命分子として、この四月に処断された人たちが言っていたこと、「四つの現代化がなりし暁には宴を設けて一夜飲み明かさん」というような話が述べられておりましたが、こんなことが復権してきたような気が致します。

それからもうちょっと詳しく見てみますと、非常に印象的なのは、この十月一日の『人民日報』だけの社説、これはいわゆる文革派の人たちが『人民日報』を握ってたわけですから、ここでは、文化大革命を引き続き推進し、継続して推し進め、そして劉少奇、林彪、鄧小平という陰謀集団を批判しなければいけないと

いう文句がありますね。これが十日の、先程来問題になっている新しい華国鋒体制、九日の日から『人民日報』の紙面は変わってくるんですが、十日の共同社説では、文化大革命という言葉は一回しか出てこない。しかもそれは、「文化大革命の成果を継承し」という形で、過去形で語っている。「今後もし引き続き文化大革命」というのではないのですね。

それで、同じようなことが、二十四日の北京の大集会、その後の二十五日の社説などにも見られるわけで、どうも私はその点では、この文化大革命から離脱という方向が見えているのではないか。しかも非常に私驚いたのですが、十月一日の社説が、劉少奇、林彪、鄧小平というように固有名詞を並べて批判しておりませんが、十月十日のほうからは劉少奇、林彪の名が消えてるんですね。これは単に中国のこういう社説、しかも新しい華国鋒体制の旅立ちの社説ですから、偶然そんな固有名詞が消えるはずはないので、ひょっとすると劉少奇の名誉回復とか、

林彪事件そのものの再検討まで含めて、意外に事態の展開が早いのではないか。あるいはリアクションが大きいのではないかと、いふふうにも見られるのですが。そこで、私は今回のむしろ先程関さんのおっしゃった陳伯達や林彪のことは、どうもそういう形で考えるよりも、つまり華国鋒も含めて、文革派だったと思うんですね。彼だって湖南の革命委員会の

主任になって、やがて党委員会の主任になるわけで、そういうことからすれば彼も文革派には違いない。この汪東典という今回かぎを握ったであろう北京の衛成区の八三一部隊、つまり親衛隊ですが毛主席を、永遠にあなたの身辺を警護しますという、ついこの間誓ったばかりの汪東興などがかぎだと思えますが、これらの人もいわゆる文革派なんです、

いわゆる上海グループじゃないんですね。つまり江青夫人を中心に出てきた新しい成り上がり者というか、新参者ではなくて、どうも調べてみますと、汪東興も非常に古くから、延安時代から陳伯達と共に毛沢東の黒子として影に存在している。警備の責任であり、同時に特務関係、公安関係を引き受けているわけで、その線と華国鋒もどうも結びつくような気がしていますね。

そうすると、いわゆるこれらの非上海グループの人たちは、いずれにせよ政治をかなり私物化していた江青グループからいずればはじき出されるか、はじき出さずか、そういう構造にあったような気がします。それが何か今回、一挙にこういう事態になったのではないのでしょうか。その辺ももう少し様子を見なきゃいけないんですが、そうしますといずれにしても、関さんのおっしゃったように華国鋒体制はたいへんな荒療治であったが、そのことをやったことによって、今一つのなだれ現象が起こっている、それは言える

思いますね。今後の展望はどうでしょうか。

関 ちょっと話もどっちらかもしれませんが、毛沢東の六二年の一月の党中央工作会議が、七千人集会といってますが、あそこで彼が指摘しているのが、古い黨員よりも、むしろ解放後の黨員、もうそのころ八〇%までが新中国になってからの黨員らしいんですが、そちらのほうに特に質の不純な分子がいて、それの中には個人主義者、あるいは官僚主義者という言葉が出てくるんですが、主観主義者というようになものに変質してしまっているのものと。それで、特にちょうど世代交替期を迎えかけていましたし、むしろ革命を話す、要するに政権を握ってからの新黨員ですね、そちらに問題があるんだと。これは当然のことなんです、そういうことを考えますと、文化革命を始めたときも、彼あとで言ってますが、党中央では針一本さす余地がなかったという、非常に孤立したごく少数派から出発したわけですね。

そうすると、結局上海だって、林彪なり、それから夫人の江青女史なりまで動員しなければならなかった。そうしますと、あの林彪なり江青女史なりがいった文化大革命を発動した毛沢東の真意を、いったいどこまで理解してたのか、まずそこら辺から疑問があるわけですね。それで、それが本当に真意を理解しないで、走狗のようになるわけですね。そ

うすると、あれが正統派であったかどうかということですね。それはみんな元女優であり、上海の宣伝部門の新聞記者、評論家みたいなものですし、本当のインテリですね。それで、評論はできても余り実務はできんというふうな、そういうものが運動の中でだんだん権力握ってゆくわけでしょう。そうするといつの間にか毛沢東が言った個人主義者、あるいは官僚主義者、それから主観主義者的に変質していった、運動の中で変質してしまおう。

彼らはいつとも批判する側だけに立って、自分が自己批判したこともなければ批判された側に立ったこともないですね。それだけが文化革命の中で異質の存在として最後まで何か残っちゃったわけです。だからあれを排除することがやはり去年の人民代表大会前にやっておくべきだったものを、今になってやったというところで、だから今中嶋さんおっしゃったような、文化革命はもう継続的じゃなくて、過去の的語られているというのではなくて一つのあすこで、今度の政変ではじめて一応みんな納得のいくように完結したということ、したがって今度文革の経験を踏まえながら、四つの近代化にこういうじゃないかと。そういうことでやっぱりこれ継承だと思っですね。ですから、四つの近代化というのは、まず農業ですね、それから工業、国防、科学技術ですね。まずその優先順でいく

んでしようし、その中で、例えば華国鋒が軍の協力を得るということで、軍のほうは非常に国防の近代化の要望が前から強くて、絶えず失脚者を出してる。そういう問題もあります、それはその四つの問題の優先順と、結局配分の問題ですね、だからそういう問題で多少は出てくるかもしれないが、農業の発展を中心にしていかにやらんというの、この一つの毛沢東路線、定着した問題ですね。だから、そんなにあの四人を片づけたあと、華国鋒体制はああいうような大きな変動はもうないんじゃないかという感じがするんです。

中嶋 なるほどね。そうすると華国鋒は第二の毛沢東とまでいかなかったも、かなり長期的に政権を維持し、強化するであろうと展望ですか。

関 それから、もう一つは年令的にもそうですね。ですから例えば鄧小平の問題がどうなるか。恐らくは時期を見て名誉回復するでしょうが、しかし彼も七十過ぎですね、葉劍英にしても季先念にしても。そうしますと、あの人たちが本当の革命家であって、それほどの個人的な権力欲のない人であればむしろ華国鋒体制を盛り上げていくと。そういう役割に回るんじゃないかという……。

中嶋 私、当面はそういうふうに見たいと思います。ただ、にもかかわらず、やはり華国鋒が出てきた基盤と、四つの近代化というものをこれまで提唱し

てきた基盤との間には、基本的なフィクションが、やがて出てくるのではないかと。そのときには華国鋒は、彼が文革派であったということが一つのジレンマになるのではないかと、私は何となく感じましてね。ですから私のトーンはむしろいわば脱文革、非毛沢東化というふうな状況を見ますからそうなると思うんですが、いずれにしても激動の中国をもう少し冷静に私ども見ていかないといけないわけで、この問題は、事は北京のある種の宮廷革命であったが、それがもたらす波紋は非常に大きいだろうと思えます。

(十月三十日放送より収録)

東京都港区赤坂二丁目九番十五号
日本短波放送

「世界に開く窓」

郵便番号 一〇七

電話東京(53) 八一五(代)

定価 一四〇円 送料二十五円

(毎月1回1日発行) 昭和52年1月1日発行 昭和40年1月20日 第3種郵便物認可

世界に開く窓

1月号No.152/1977



カナダのトルドー首相は、政府公賓として十月二十日に来日した。滞在中、三木首相をはじめ主要閣僚、政界、経済界首脳と会談、地方視察などを終え、二十六日、日加共同声明を発表した。
写真は、二回目の会談をするトルドー・カナダ首相(右)と三木首相。
(二十六日、東京・元赤坂の迎賓館で)

これからの日加関係・齋藤 邦彦
齋藤 志郎

日ソ国交回復20周年を迎えて・橘 正忠
生田 真司

タイとASEAN・枝村 純郎
田久保忠衛

波乱の中国情勢・中嶋 嶺雄
関 憲三郎



日本短波放送